

中山瓦窯出土の瓦磚

—第79-5次調査を中心として—

はじめに 中山瓦窯は平城宮北方の奈良山丘陵南西に位置し、奈良時代初頭から前半に操業した平城宮所用瓦の一大生産地である。1961年の分布踏査でその存在が知られ（本紀要38頁参照）、1972年の第79-5次調査では7カ所計10基の瓦窯を発掘した（『年報1973』）。近年でも第523次調査で3基の窯を検出している（『紀要2015』）。

中山瓦窯出土瓦磚に関しては、第523次調査では、第一次大極殿所用瓦6284Cや第二次大極殿院・東区朝堂院所用瓦6225C、6663Cなど奈良時代前半の軒瓦や鬼瓦IAが出土している（『紀要2015』）。しかし、第79-5次調査出土瓦については、これまで『年報1973』などで報告があるものの、型式・種、数量、遺存状態等、詳細な様相は不明であった。そこで、本報告では軒瓦、鬼瓦そして道具瓦を中心に第79-5次調査資料を見直し、報告をおこなう。

なお、瓦磚がどの瓦窯から出土したかは、資料にある注記をもとにしている。しかし、詳細な出土位置・層位が不明なものが多く、加えて窯同士も隣接する。そのため、例えば1号窯出土とされる資料でも、本当に1号窯で生産されたかは本来は再検討が必要である。ただし、今回は中山瓦窯でどのような瓦を生産していたかを把握することを主目的とするため、正確な出土位置などについては今後、正式報告をおこなう際の課題としたい。

第79-5次調査の概要 瓦窯は1～7号窯を検出した。そのうち、3・4・6号窯は2つの窯が重複しており、それぞれ3-A・B、4-A・B、6-A・B号窯に分けられる（図248）。窯形態は、1号窯、4-A・B号窯、5号窯、6-A・B号窯、7号窯が窯窯、2号窯、3-B号窯が平窯、3-A号窯が不明とされる。また、第79-5次調査と同時期に調査区の東60mで採集された資料があり（図247のA地点）。ここにも瓦窯の存在が推定できる。ここから採集した資料についてもあわせて報告する。

中山瓦窯出土瓦磚 第79-5次調査、およびA地点から出土した軒瓦、鬼瓦、道具瓦は表35のとおりである。まず、軒丸瓦および軒平瓦を報告した後に、鬼瓦、蟻羽瓦について報告する。

図249-1～14は軒丸瓦。1は6231B。大官大寺および大安寺所用。6231Bは粘土紐作りとされるが、外縁のみ

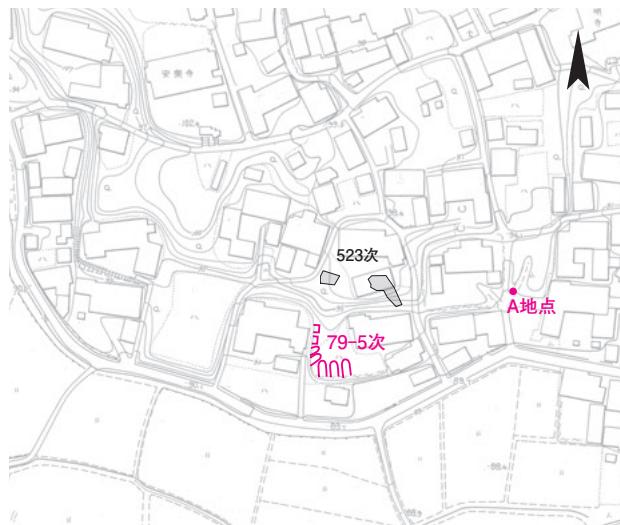


図247 第79-5次調査およびA地点位置図 1:2500

の小片で詳細は不明である。7号窯出土。2は6284C。6号窯出土。6284Cは第523次調査で検出した瓦窯SY330からも出土した。1・2の接合手法は瓦当裏面に丸瓦を接合する接合式。時期はI-1期。3は6304L。大型で鳥衾と考えられる。4号窯出土。I-2期。4は6304B。A地点出土。5は6311Ba。6号窯出土。6～8は小型で甍棟用と考えられる。6は6313Aa。6号窯出土。6313Aは4・5号窯でも出土している。7は6313B。4号窯出土。8は6314C。A地点出土。4～8はすべて接合式。時期はII-2期。9は6307A。接合式。A地点出土。10は6308Aa。横置き型成形台を用いた一本造り。5号窯出土。ほかにも4・6号窯でも出土した。6308Aaはある段階で瓦当に大きな範割れが生じるが、本調査区内出土で当該箇所が残存する6308Aaにはすべて範割れが確認できた。11は6311D。製作当初から瓦当部のみで丸瓦部がない。ただし、瓦当裏面には丸瓦を一度接合したのちに、丸瓦部を切り落とした痕跡がある。6号窯出土。12は6311H。接合式。6号窯出土。13は6225A。一本造り。4号窯出土。14は6225L。大型で鳥衾と考えられる。接合式。6号窯出土。11～14の時期はII-2期だが、13・14はIII-1期まで生産されたと考えられる。

図250-15～22は軒平瓦。15・16は6664C。15も11と同様、製作当初から瓦当部のみで平瓦部がない。16は凸面に横縄叩きをもつ。17は6664H。凸面は同じく横縄叩き。16・17は粘土板桶巻作り。顎形態は段顎IS。15～17は4号窯出土。I-1期。18は6664F。顎形態は段顎IS。4号窯出土。6664Fは6号窯でも出土した。19は6666A。平城宮式のなかでは比較的小型で甍棟用と考えられる。凸面には縦縄叩きがある。顎形態は段顎IS。4号窯出土。なお6666Aには同じ4号窯出土で凸面が横縄叩きの

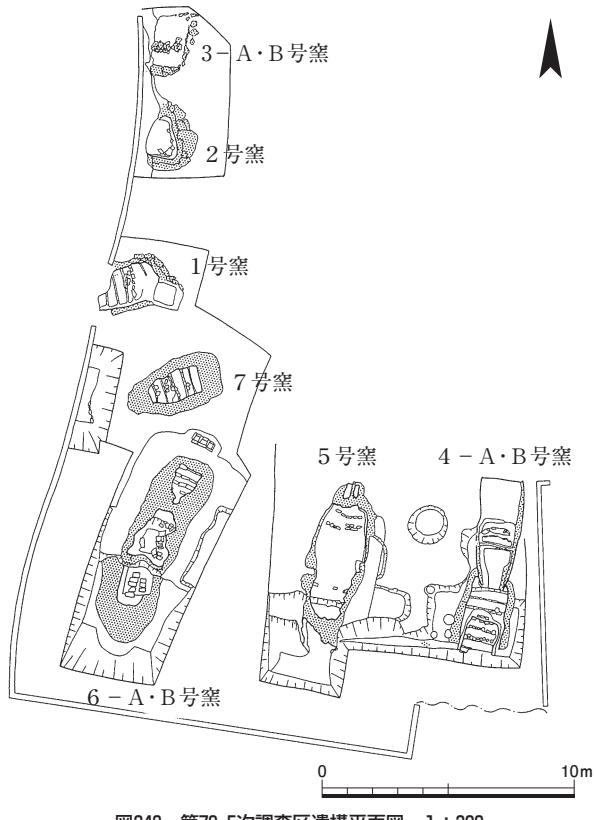


図248 第79-5次調査区遺構平面図 1:300

ものもある。20は6685A。6号窯出土。18~20は一枚作りで顎形態は段顎IS。II-1期。21は6663L。一枚作りで顎形態は曲線顎I。1号窯出土。22は小片で断定はできないが、6721Cの可能性が高い。4号窯出土。21・22はII-2期。

23は鬼瓦IA。4号窯出土。I期。鬼瓦IAは5・6号窯からも出土した。24は鬼瓦IVA。6号窯出土。時期はII期。25は鬼瓦III。4号窯出土。時期はIII期。

26・27は建物の妻端を飾る蟻羽瓦。26は側面のみに文様がある。狭端に短い玉縁があり、両隅を打ち欠く。27は側面と広端面に文様がある。凸面には蟻羽に固定するためのL字状の段がある。蟻羽隅の瓦とみられる。瓦当文様は6685型式に酷似し、時期はII-1期か。蟻羽瓦は4号窯西に接する小土坑より出土(『年報1973』)。中山瓦窯で生産された蟻羽瓦は平城宮内ではこれまで出土例がなく、実際には使用されなかった可能性が高い。

まとめ 以上、第79-5次調査およびA地点採集の瓦磚を報告した。ここでは①生産年代、②製作技法、③平城宮内の使用状況の3点について言及し、今回の成果としてまとめたい。

まず①に関して、出土瓦磚の年代はI-1~III期までわたるが、特にII期の資料が多い。また4・6号窯からはI~II期までの軒瓦が出土しているが、いずれも瓦窯が2基重複している。今後、A・Bいずれの窯で生産されたか検討が必要だが、第79-5次調査区では、瓦窯を作り替えながらも、奈良時代前半を通して瓦生産がおこな

表35 第79-5次調査およびA地点出土瓦磚類集計表

	軒丸瓦			軒平瓦			その他	
	型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
1号窯	6225		1	6663	L	1		
	6304	L	1	6664	C	3	蟻羽瓦	19
	6313	Aa	1		F	1	鬼瓦IA	1
		B	1		H	2	鬼瓦III	1
			1	6666	A	2	面戸瓦	4
	6308	Aa	4	6721	C?	1		
			1		不明	1		
4号窯	6225	A	1					
	6311?		1					
	不明		1					
5号窯	6313	A	1	不明		1	鬼瓦IA	1
	6308	Aa	4				面戸瓦	1
6号窯	6284	C	1	6664	F	1	鬼瓦IA	3
	6311	Ba	2	6685	A	1	鬼瓦IVA	1
		B?	1				面戸瓦	5
		D	1				隅切瓦	1
	6311	H	1				熨斗瓦	1
	6313	Aa	1					
	6225	A	2					
7号窯		L	1					
	6308	Aa	5					
		A	1					
	不明		1					
	6231	B	2					
A地点	6304	B	1					
	6314	C	1					
	6307	A	3					

われていたと考えられる。

②に関しては、中山瓦窯では従来から、軒丸瓦には接合式と一本作り、軒平瓦には粘土板桶巻作りと一枚作りとがあるとされている。今回の調査でもこのことを追認した。また、瓦当部のみの6311Dや6664Cがあることは特筆できる。これらは実際に屋根に葺かれたとは想定しがたく、おそらくは工房内での製品見本や試作品として製作されたものであろう。さらに平城宮では出土例のない蟻羽瓦も生産されている。中山瓦窯では新技術を導入したり、新たな瓦製品を試作するなど、さまざまな工夫をしていた様子がうかがえる。

最後に③については、出土型式も多様で時期幅もあるため、平城宮内での分布状況も広範囲にわたる。I期は、第一次大極殿所用6284C-6664Cが出土している。また、II期には6304B、6307A、6308A、6313A・B、6314C、6664F、6666A、6685Aなど、内裏地区や内裏北・東外郭地区、第二次大極殿東外郭地区で多く出土する型式が目を引く。また、第二次大極殿所用6225Aも出土している。以上から本調査区では、平城宮造営当初には第一次大極殿の瓦を生産し、II期以降は内裏や内裏周辺の官衙施設などの瓦を中心に第二次大極殿や東区朝堂院の瓦も生産するなど、宮内へ多様な瓦を供給していたことが改めて確認できた。

(石田由紀子)

付記

本稿はJSPS科研費26770279の成果の一部を含む。

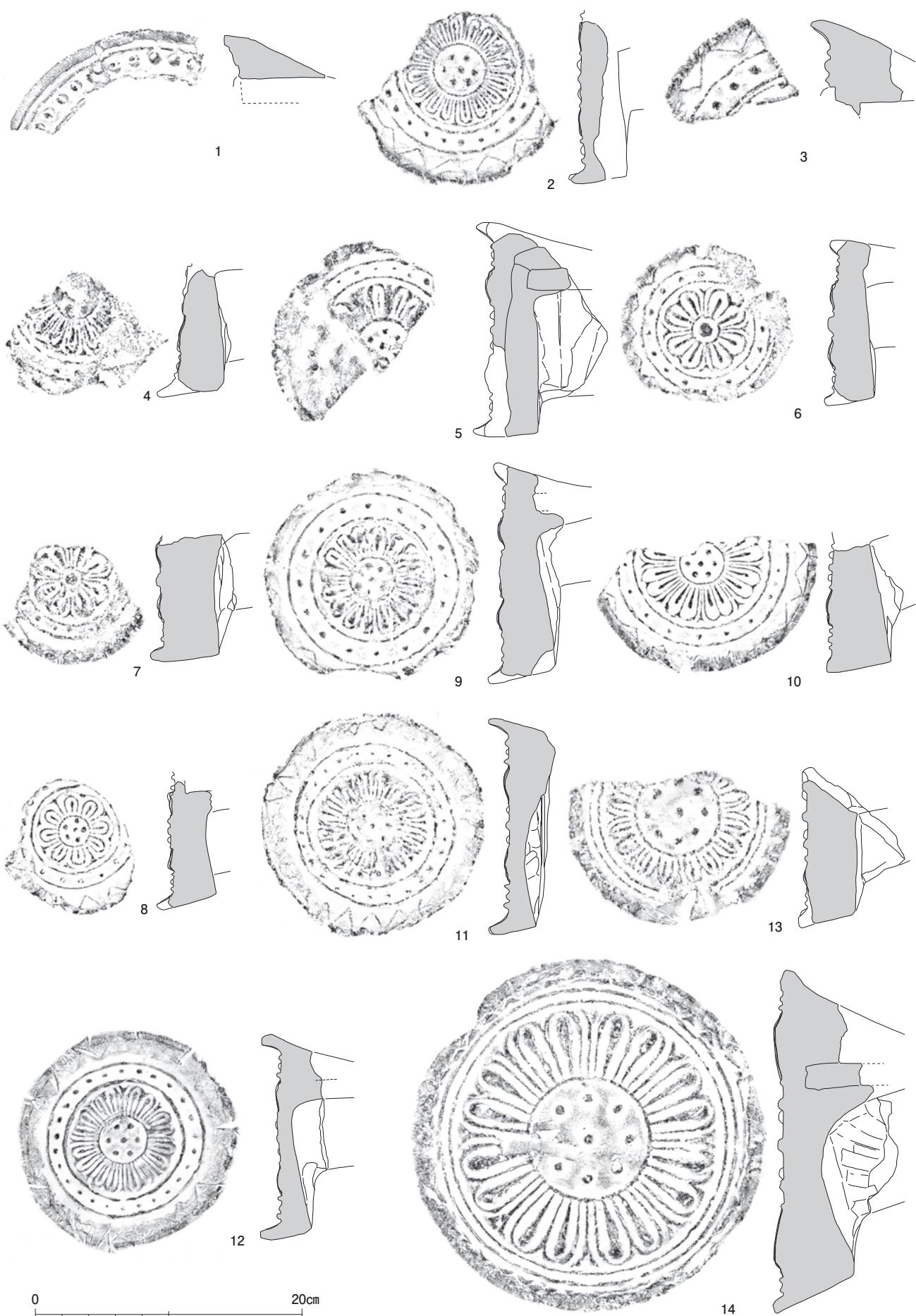


図249 第79-5次調査およびA地点出土軒丸瓦 1:4

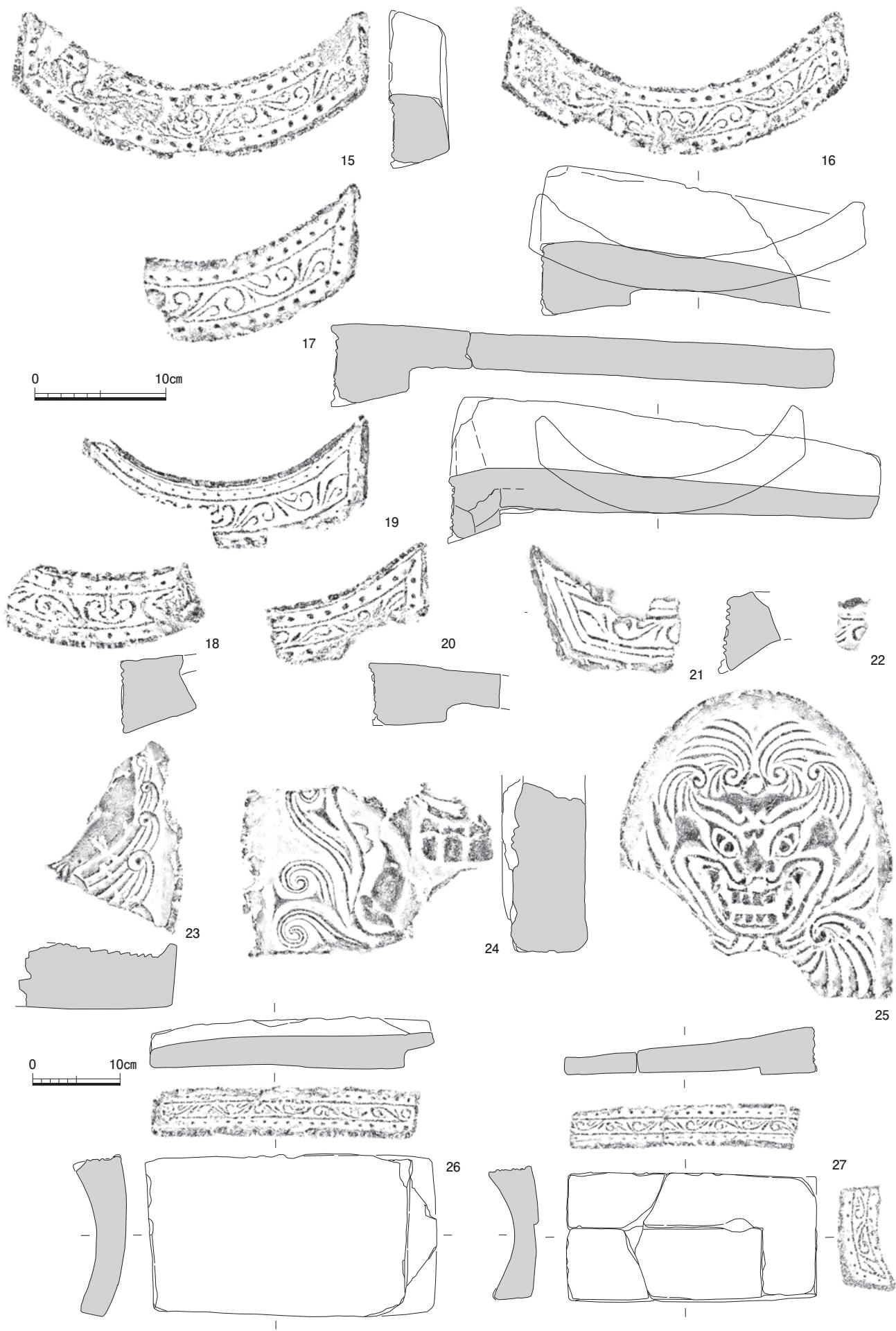


図250 第79-5次調査およびA地点出土軒平瓦、鬼瓦、蟻羽瓦 1:4 (23~27は1:6)